

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2014.3.3
VOL. 63

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

越年雑感

笠井和明

今更ながらであるが、この街はいつ眠るのだろうと思った。

午前5時過ぎ、新宿駅西口の一部のシャッターは既に開いているが、次のシャッターの前に移動した十数名の仲間の寝息を聴き、安心しながら、改札を抜け、新宿駅に登れば、数百人では効かない人々がホームを埋め尽くす。ほとんどが若い人々だが、始発を待って、自宅へ帰るのであろうか。それにしてもこれだけの人口を夜の間に新宿は抱えていたのかと、そのバイタリティには感嘆をする。

そこから2駅の高田馬場駅で下車をする。そこには駅手配を待つ建設労働者の姿がちりほらり。新宿の駅ではまだ寝ている仲間が多いと云うのに、この駅では仕事のため、もう動き回っている。この落差が何とも言えぬ味を出している。

駅前のそば屋でそばをすすり、事務所に戻れば、宿泊の建物にはもう3部屋、電気がついている。宿直の職員に聞けば、「とにかく早い奴は早やいんだよ」と、当然の如く言われてしまった。



16年前、長野オリンピックの年も東京は雪が多かった。オリンピック選手やそれに熱狂した世論が回想する16年前とは違い、新宿の16年前は西口地下ダンボール村の消失と4名の焼死、そして、西口地下からの拠点撤退、中央公園へ拠点移転をたった1週間の内、ぼろぼろになりながら、けれど、何かに取り憑かれたようやり抜いた冬でもある。

今思えば、拠点をそのままどこかへ移すと云う発想はなく、「拠点型から移動型への転換」なることを、当時もあちこちで確か言っていたと思う。生き残るために、標的になるような集住は避け、とにかく散けると云うのが方針であった。

目の前にある現実を、そのまま社会に問うて欲しいと云うのが、初期のマスコミ戦術でもあった。この問題が社会から埋もれないよう、また、社会的な何かしらの矛盾がそこにはあり、そのことをまずは知ってもらいたいと云う、どの社会運度でも最初にとる発想である。

けれども度が過ぎ、問題が複雑化すると、我々の思いとは、ほど遠いところに事態は行ってしまふ。

この暮れもマスコミ各社から連絡をもらった。炊き出しなんて目立った活動をしていると、寒くなると毎年そんなことがある。取材の意図がわからないと電話などでいろいろと質問をする。相手はテレビに出て、オタクも寄付金があつまって良いことだらけでしょうと、そんな頭があるものだから、取材を受けないことが不思議のようで、議



論は噛み合わない。結局「絵が欲しいだけなんでしょ？」と、問えば、「その通りです」と答える。その「モザイクだらけの絵」が年末年始の世情でもあるかのような報じられ、そして、その時々の政権を批判するようコメントーターに利用され、お涙頂戴でお終いである。

この冬、世間を騒がせた「偽ベートーベン」事件でも、そのドキュメント報道の在り方がいろいろと批判されているが、どこの世界でも同じようなものなのだなあ、結局、自分より弱い立場の人の存在を確認しなければ（逆に自分の「敵」をいなければ作らなければ）成り立たない社会なのだなあ、変に関心したりもする。まあ、自作自演と云えば、世間の動向を察知し、こんな調子のマスコミを利用し、お涙頂戴劇を続けている人も、この業界の中にいろいろ居たなあ、これまた変に実感したりもする。

まあ、そう言う世間に右往左往しているのが政策なのだから、これまた何ら「実」のないものなのであるが、そう言う世間から税金集めてやっているのが政策ならば、これまた仕方がないことであろうが、それにしても、現実を深く知るものからすると、何だか情けない。

とある昔、路上の大先輩から「この世界、目立ってしまったらお終いなのである云々」と底辺文化史継承の極意を聞かされたことがあったが、今思えばその継承はまだまだであったと思う。残念ながら、この大先輩からは、「仮に目立ってしまったら、どのように解消するのか」の極意は聞かされなかったし、この大先輩も経験されていなかったのであろう。

時代が悪かったと言えば時代は最悪であった。16年前、中央公園に一部移住した人々は、先への展望を見失い、そこを拠点にしてしまい、結果、ダンボール村からテント村に名称が変わっただけとなった（172名もの仲間が路上ではない、当時の自立支援策につなげたにもかかわらず）。

そんなこんなで、我々もそこを拠点にせざるを得なかった。そして、それが地域社会どころか、都政上、また大都市を中心にした全国化の中で国政上の問題ともなり、侃々諤々の議論が開始された時、都庁と支援団体が無い知恵を出し合って企画、実践されたのが「地域生活移行支援事業」である。この事業があったからこそ、多くのテントは解消され、大した騒動も起こることなく平和的な解決の道筋が見えて来た。騒ぎが起こる前に淡々と実務を重ね、情報を曖昧にし、世間が気がついたころはテントは少なくなっていた。対策においても、これが理想型である。事情を知らない人が久しぶりに中央公園や戸山公園に来、「あらら、追い出されちゃったの?」と言ったり、騒いでいたのを、我々はほくそ笑んで楽しんだものである。

そこにある社会問題は永遠にそこにあり続けると勘違いをする人々が多い。支援の方も自分の仕事なくなるものだから、そこにあり続けるような仕事を、それこそマスコミと癒着し、振りまくから尚更である。

「ネットカフェ難民」までは、そこその実態があり（それほど騒ぐ程でもないのであるが）、それなりにイメージは出来たが、「若者ホームレス」なんてことになると、我々の側でさえ、概念があまりにも曖昧なので把握すらしていないのに、いかにもそこに居るかのように、マスコミやら、ボランティアが炊き出しに探しに来る。

まるで「ツチノコ騒動」のようなものである。

居れば居るで同情したり、排除したりとする癖に、居ないとなるとでっち上げもお構いなし。もうちょっと、冷静に物事を見なさいよと、思うこと頻りである。

炊き出しで言えば、炊き出しと云う事象で判断するのではなく、どのような人々が集まり、どのような人々が活用しているのかを冷静に見て必要性を判断しなさいよ、と云うことである。

●●●●と対策をするのは、まあ面白いものなのであるが、あれから14年経って戸山公園からテントは消え、15年経って中央公園からあの頃の人々は移行を済ませた。まさに、年に数年のこそこそ対策である。

我々に課せられた大きな宿題は終わった。これで、当時思い描いていた「拠点型から移動型への転換」の条件は整った。しかも、当時より圧倒的に少ない規模で。

このように、新宿では「公園の時代（ダンボール

村からテント村への定住化の時代)」は終わりを告げている。まあ、もちろん都内全域を見渡せば、隣に大きな都立公園があり、そっちの問題は解決していないと云うか、解決しようとしていないと云おうか、そんな状況があちこちにまだあるので、「地域生活移行支援事業」が目差していたものがすべて完結したとは、まだまだ言えないのであるが、路上生活者全体からすればテント生活者は今や少数派ではないので、地域対策の中で解消されていくか、それともひっそりとどうにかなってしまうのか、そんなレベルになるだろう。

こんなことを書くと「少数派は切り捨てるのか」なるおかしな批判を浴びそうであるが、新宿ではその少数派を対象にしてこれまで、こそこそと対策を重ねて来たのであり、これからも、こそこそと対策を重ねるので、切り捨てどころか、我々は良い意味での「共犯者」であり、「共犯者」であり続けるだろう。実践をしなければ、何を言っても批判にはならないのであり、また、その実践が大規模であるうが、ころこそであるうが、それはどちらでも良いのである。我々は「正義の味方」でも何でもなく、路上の現象、底辺の現状に真摯に向き合い、自分の意思で勝手に実践する団体であるから、尚更である。

制度の話しかしないのは、「制度屋」さんで、まあ、そういう人々も社会福祉士など、制度の運用において必要なのであるうが、路上で制度の話しかしないのは、「生活保護手配師」と呼ばれ、こう云う人々が路上に多くなると、そこから逃げようとする人々も多くなる。宗教屋さんが、あまりに熱心すぎると辟易されるのと同じ構図である。必要があったとしても、それを活用しようとするかしないかは、その時々状況によって違う。観察眼がなく、人の機微が分からないと、先には決して進めないのである。

まあ、炊き出しなどは、いかにも「何かをしてやっている」と、勘違いをさせる最たるもので、かつ目立った活動だけに、他人の食事処にずかずかと見物客が集まり、カメラを回したり、写真を取ったり、人さらいをしたり、演説をしたり、デマを流したり、憐憫の目で見られたりと、「飯くらいもっと静かに食わせるよ」と思う、まったく迷惑千万な場所でもある。まあ、食事と云う「武器」(必需品)を支援する側が悪利用し固定化してきた最たるものである。炊き出しの発展とは、アメリカのスープキッチン、フードパントリー(食料配給所)やフードスタンプなどに代表されるよう、「食」に限定した支援に集約されるべきであろうし、その「場」を「食」とは

直接的無関係の政治的、政策的、宗教的に利用するのは、やはりどうかと思うのである。誤解をされると何なので付け加えれば、私たちが新宿で知り合った宗教家の多くの方は、皆、控えめな方が多く、とても好感が持てた。布教よりも、自らに課した修行を優先させる立場の方々である。どうかと思う方はほんの一部の方々である。本来、そう云う地道な活動をこつこつやっている方々が底辺の「光」になるのであり、これからもそうあるべきであろう。

あれあれ、越年の報告と思っていたが、紙面がなくなってしまった。

いつものことを、いつものように淡々と実施した越年であったので、とりわけ何があった訳ではないのであるが、このように見栄えも悪く、パツとしない活動を淡々と支えて下さったの方々には感謝しかない。

これまでの越年の手法は一つの手法でしかない。まあ、それにはそれなりの歴史があり、根拠があり、ある意味必然的にこうなってしまったのであるが、惰性を惰性のまま続けて来てしまった感が強い。年末年始だけ人が困る訳ではない。冬は今年の東京の気候のよう、1月に春日があり、2月に厳冬となる。年末年始は比較的気候は穏やかである。我々は何とたたかっていたのか?情けないことに、その答えはすぐには出ない。

16年前、我々は運動の「惰性」に対し「意識性」を対置させた。

「我々には、未来に責任を持つことが必要だ。過渡期としての路上からの発展の経路を我々は我々の言葉で語り始めねばならないし、そのためのたたかいに立ちあがらなければならない。それは、行政や学者が語るのではなく、我々運動体こそが責任を持って語れることであろう。

越年・越冬闘争がスケジュール闘争としてこなし終わったら、我々は同じことを繰り返さざるを得ない。本越冬以降のたたかいが消耗戦のたたかいとならないとためにも、我々はこの地下の路上から天空に手を差し延べていきたい。

我々が出会った野宿者は決して団結して終わる野宿者ではない。」(第四回新宿越年越冬闘争支援連帯集会基調より)

あの時と同じ拙い言葉をここで繰り返しておきたい。思いだけは、何故だか今も変わらない。

(了)

越年のパトロールは、12/28-1/5のうち6日あてた。2勤1休を基に、2日ごとに一定の範囲を取めた。新宿のほか、高田馬場と神宮外苑を回った。雨天はまったくなし。

24時までの総数は、平均で300人を切る。13年10月ごろから、この傾向が続く。駅を東西に分けるほか、一周するコースを設けた。早い時間では、ここに中央公園を加え、9割近くがとらえられる。救急車の要請はなかった。こちらもこのところの状況を引き継ぐ。

毎週のパトロールで、昨年立ち会った救急搬送は三件。昔より明らかに好転する。かつて区内の行き倒れが年に50人前後を数え、こう評された時期がある。「病状が重いほうに救いがある。…軽いゆえに通院という診断をくだされ、社会復帰はおろか命を失う人がいる現実」(中村智志『路上の夢 新宿ホームレス物語』)。

急場への備えが減った分、間接的な働きに配慮したい。野宿の世界は狭く、意外とお互いを知らない。閉ざされた空間は、概して内側から壊れて

いく。新宿ではむごい事件は少なく、外からの訪れが緩衝をなすように思う。微妙なすれ違いは否めないけれど。

路上を巡っていると、つい相手に体は大丈夫か聞く。期間中、そう問われるのが嫌という男性と話した。真冬の地べたで寝て、「大丈夫」なことなどあまりない。言葉づかいひとつに、彼我の差が浮かぶ。

炊き出しに並ぶのは、自らの必要による。パトロールの需給はやや違う。先方が接触を望むと限らず、拒絶を招きうる。予定通りにいかない点で、隔たりこそ特徴といえなくはない。

この越年は、長くかかわってきたIさん抜きだった。それは氏がないのではなく、不在という形で「そこにいる」印象を抱かせた。似た感じを野宿の仲間に対し覚える。ビルの陰や公園のベンチで寝泊まりしていた、なじみの誰かが不意に姿を消す。あとに余韻が残る。

離れていても、人は共鳴し続ける。そんなふうにかみしめて、新宿の街を歩きます。

越年パトロール記録

日付	時間	コース*									計
		東	西	北	駅周	中	高	4	地	神	
12/29 (日)	20:00~	17	38	19		84					
	23:00~							23	74		
12/30 (月)	16:00~					74					
	20:30~				57					22	
1/1 (水)	20:00~				41		29				
	23:00~							25	66		
1/2(木)	20:30~				54	109					
1/4 (土)	20:00~	22	35			115					
	23:00~							29	69		
1/5 (日)	16:00~					71					
	20:30~				54					22	
平均		19	36	19	(51)	90	29	25	69	(22)	
昨年度平均		36	31	24		116	34	24	64	(29)	329
一昨年度平均		46	34	25		117	46	38	66	(35)	372

* = 駅東口/西口/北/駅一周/中央公園/高田馬場/4号街路/地下広場/神宮外苑 単位=人(カッコ内は合せず)

越年概数調査

		1/3/1:30~	
地下広場		90	
4号街路		38	
都庁下		6	
東口	アルタ	5	8
	ルミネ	3	
西口	小田急	25	44
	バス停	1	
	京王	3	
	スバル	15	
南口		11	
西武新宿		15	
中央公園		90	
高田馬場		29	
神宮外苑		22	
江戸川橋		24	
紅葉山		3	
計		380	

概数調査は1月3日の未明、終電後に行った。一部で早い時間の結果(平均)を採った。前回(467名)比で、2割の減。どの層で顕著かわからないが(炊き出しはさほど変わらず)、仕事の有無が影響したか。

女性と確かめられたのが10名、全体の3%ほど。自治体や研究機関の数字でも同程度を占める。深夜営業店などを使うと、表面化しにくい。「路上に現れていない『隠れホームレス』のなかには、女性が多く含まれる」(丸山里美『女性ホームレスとして生きる』)の指摘がある。

駅周辺では、西側に人が集まる。東より店じまいが早く、地下なら寒さがしのげる。仕事がらみの理由が考えられる。3時過ぎ、西口某所で稼ぎへ向かうとおぼしき一群を見た。「新宿西口も、駅手配の寄せ場であり…日雇労働を未経験の野宿者のほとんどは、駅手配の寄せ場へと吸収されていた」(青木秀男編『寄せ場 / ホームレスの社会学』)と、推測されて久しい。

女性にネットカフェやマンガ喫茶を、男性に寄せ場的な機能を。新旧ないませ、不安定な滞留者を包みこむ。オリンピックが決まった今、都市の度量が試される。

2013/12/28~2014/1/5越年炊き出し実数表 新宿中央公園「水の広場」

月日	12月28日	12月29日	12月30日	12月31日	1月1日	1月2日	1月3日	1月4日	1月5日
曜日	土	日	月	火	水	木	金	土	日
天候	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ	晴れ
新宿昼の炊き出し実数		120	222	268	245	264	240	240	180
新宿夜の炊き出し実数	75	224	280	296	256	307	260	272	326

特記事項

東京都の年末対策はなし。厳冬期宿泊は縮小、新宿区からはこの時期5~7名宿泊のみ
12/28日昼はアントニオ猪木氏による炊出し(実数260名)*大量弁当配布のため夜の炊出し数に明らかな影響
中央教会などのその他の支援は例年通り

	述べ人数	平均	対前年度比
新宿昼の炊き出し実数	1,779	222	-59
新宿夜の炊き出し実数	2,296	255	-8

活動期間：

2013年12月29日から2014年1月6日まで9日間

活動場所：新宿中央公園水の広場（12月29日-1月6日）

活動内容：医療テントを設置、医療職ボランティアによる昼夜2交代・24時間対応

血圧測定、創処置、医療・歯科相談、市販薬提供、衰弱・要介護者保護、福祉生活相談
集中医療相談（12/30、1/5）、
鍼灸あんま相談（12/30）、
生保申請手続き付添（福祉行動1/4）

参加ボランティア 51名

医師14、歯科医師1、看護職12、歯科衛生士1、
薬剤師1、鍼灸師10、一般4、学生8

<医療テント活動> （ ）内は12-13越年期の数

医療相談記録作成者数 51(41) 男性 49(39)
女性 2(2)

平均年齢：

54.8歳(52.7歳)、最低 21歳(23歳)、最高 78歳(70歳)

年齢分布：20代 3(2)

30代 2(5)

40代 11(7)

50代 12(10)

60代 14(15)

70代 9(2)

20-39歳 9.8%(17.1%)

40-64歳 64.7%(68.3%)

65歳以上 25.5%(14.6%)

医療テント宿泊保護者数 6(7)

延べ数 33(21) (人X日数) 男性 6

テント保護後緊急一時宿泊者数 0(2)

延べ数 (8) (人X日数)

<福祉行動結果>

年齢 性別 症状：対応 越年後経過

テント保護

- 57 男 嘔吐・意識障害：救急搬送、入院「小脳出血」緊急手術 経過良好 1/7リハ目的転医
- 37 男 うつ病・歩行困難：1/6新宿福祉行動 精神科受診、施設入所 12/31-1/6
- 44 男 統合失調症：1/6新宿福祉行動 以前からしていた福祉相談を継続 1/4-1/6
- 78 男 12/24心不全退院後：1/6渋谷福祉行動 生活保護継続、施設入所 12/30-1/6
- 61 男 難聴：1/6新宿福祉行動 耳鼻科受診「慢性中耳炎」施設入所
- 71 男 高血圧・浮腫：1/6新宿福祉行動 内科受診「慢性心不全・高血圧」
- 64 男 高血圧：12/31,1/3内科受診、受診継続
- 72 男 下肢蜂窩織炎・上肢皮膚炎：処置継続、1/5池袋でシェルター入所 1/1-1/5
- 42 男 うつ病・解離性障害：生保受給中、1/6自分で松戸福祉へ 12/30-1/6
- 41 男 知的障害：1/6郵便局で返金手続きのため渋谷まで送る 12/30-1/6
- 53 男 胃潰瘍：中野福祉へ
- 43 男 糖尿病：1/13新宿福祉へ
- 35 男 失職・生活相談：1/6とまり木相談



相談時症状：相談記録作成者51名

感冒5、皮膚炎4、腰痛4、高血圧4、関節炎4、
生活相談4、嘔吐4、糖尿病3、挫創3、心疾患3、
下痢3、胃潰瘍3

緊急宿泊 1 (他組織の施設)

新宿区以外の福祉へ 3 (2)

生活保護受給者の相談 6 (3)

精神疾患・

アルコール依存の主訴及び既往のある受診者 5 (9)

血圧測定：延べ30名

市販薬提供：延べ589名

処置件数：延べ15名

以上

<越年活動結果>

越年期緊急受診：1件(1)：小脳出血、緊急手術入院

紹介状枚数 17(17)

福祉行動後医療機関受診通院治療 5(10)：

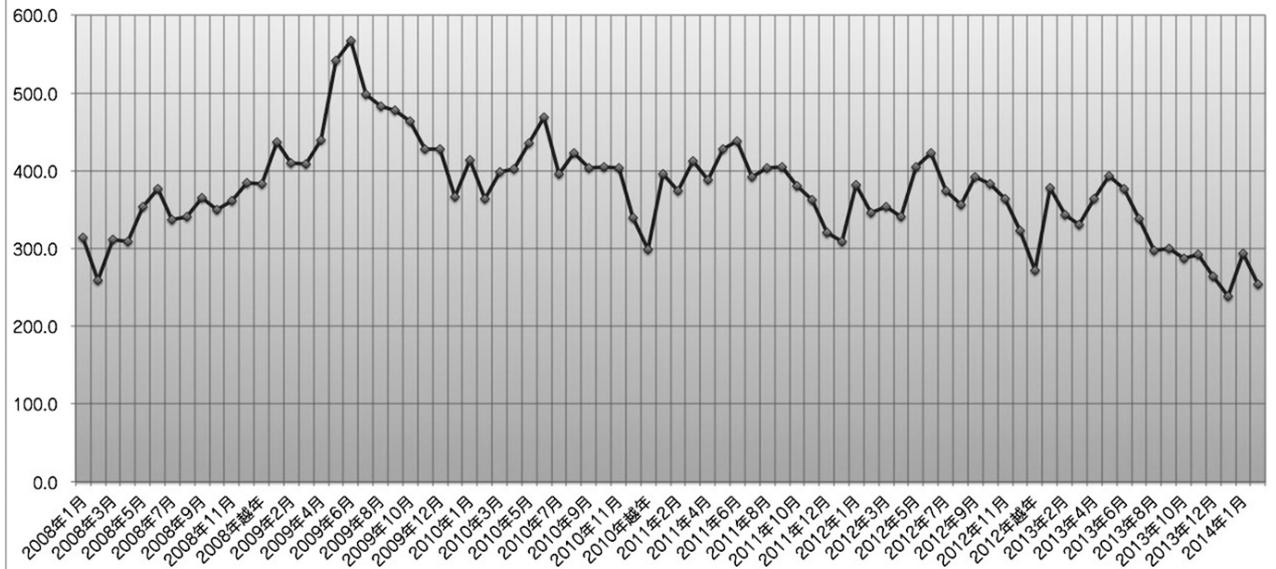
うつ病、慢性中耳炎、慢性心不全・高血圧、胃潰瘍、
糖尿病

福祉行動後医療機関入院治療 0(2)

福祉行動後施設入所 3(8)



2008-2014 炊出し実数推移



新宿連絡会 会計報告

2013年度11-1月報告

2013年度11-1月期 新宿連絡会会計収支報告

今期も多くのご支援を頂き、越年越冬活動を支えて頂きました。どうもありがとうございます。

頂いたお金は連絡会の運営費や仲間のために全て使い切っております。現在多少赤字となっておりますが、必要性のある活動が続きますので、今後ともご支援宜しくお願い致します。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
Ⅰ計上収入の部		消耗品費	17,409
1 寄付金収入	1,713,940	事務用品費	11,880
		衛生管理費	11,135
計上収入合計		支払手数料	8,030
		修繕費	0
Ⅱ計上支出の部		雑費	0
1 事業費		計上支出合計	1,822,443
炊き出し事業	504,844	計上収支差額	△108,503
越年越冬事業	1,193,865	前期収支差額	△374,411
夏まつり事業		次期繰越金	△489,914
花見事業			
池袋支援事業			
その他活動事業			
2 管理費			
旅費交通費	0		
通信費	75,280		

<4月からの活動再編のお知らせ>

- ①毎週日曜炊き出しとパトロールを統合し、炊き出しに来れない仲間を含め、新宿区全域と周辺の路上の仲間に食事と情報を提供していきます。

<ボランティア集合は毎週日曜日午後2時高田馬場事務所集合に変更します。新宿地域の2次パトロール、水曜日の高田馬場地域のパトロールは従来通り実施します。>

- ②衣類配布は火曜、木曜のシャワーサービス時の着替え用として提供をします。

<衣類募集は縮小し、タオル、石けん、下着類を中心にした募集に切り替えます。>

- ③医療相談会は毎月1回従来通り実施しますが、実施拠点を高田馬場事務所に変え、かつ移動型の医療相談を模索していきます。

<医療ボランティア集合場所は高田馬場事務所となります。時間等は後日>

- ④夏祭りなどのイベント型の活動は休止します。

<夏まつりは慰霊祭に変更、越年越冬の取り組みは集中ボランティア活動に変更する予定です。詳細は後日>

旧来のしがらみを捨て、より路上の仲間にとって実効性のある活動に再編しますので、引き続きご支援のほど、よろしく願いいたします。また、団体でのボランティア参加、マスコミ等の取材はお断りさせていただきます。

- 活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

- 郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。